

# A Japanese Translation of Sribhasya I.1.1-4.([1]-[6])

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/922">http://hdl.handle.net/2297/922</a>

『聖註』 I .1.1-4和訳 ([1]-[6])<sup>1</sup>

島 岩

A Japanese Translation of *Śrībhāṣya* I .1.1-4 ([1]-[6])

Iwao SHIMA

[1] 帰敬偈

1. 最高のブラフマンにとって、全世界の創造・維持・破壊などは、ほんの遊戯にしかすぎない。この最高のブラフマンが、[自らに]ひれふすさまざまな生き物の群れを守護しようと意をかためておられるのだ<sup>2</sup>。最高のブラフマンは、天啓聖典の頂点に光り輝く存在であり、シュリー（ラクシュミー）女神の住処である<sup>3</sup>。この最高のブラフマンにたいする私の熱烈な思いが、バクティという姿をどうかとりますように。

2. パラーシャの息子（ヴァーサ=バーダラーヤナ）<sup>4</sup>の言葉という甘露は、ウパニシャッドという乳海の真ん中から抽出され<sup>5</sup>、燃えさかる輪廻の火に生気を奪われたアートマンを活気づけてくれるものである。[その彼の言葉は]、先師たちが[古くから]よく守ってきたのではあるが、[最近では]さまざまな見解に損なわれて縁遠いものとなってしまっている。だが、[その言葉を今、私が]、自らの言葉で身近に引き寄せてきたのである。[その言葉の甘露を]、地上の神々（バラモンたち）が、日々お飲みくださいますように。

<sup>1</sup>この和訳に際しては、R.D. Karmarkar (ed.), *Śrībhāṣya of Rāmānuja (Part I : Catuḥsūtrī)*, University of Poona Sanskrit and Prakrit Series, Vol. I, Poona 1959 を底本として用い、[1]-[6]という番号はこのテキストにふされた番号に従った。ただし、その番号のあとにつけられた見出しは訳者による。また、和訳にあたって参照した英訳は、上記の底本に収められたものと、George Thibaut (tr.), *The Vedānta-Sūtras with the Commentary by Rāmānuja*, The Sacred Books of the East, Vol. XLVII, Motilal Banarsidass, 1971 (rept.)、および、M. Rangacharya and M B. Varadaraja Iyengar (tr.), *The Vedānta-Sūtras with the Śrībhāṣya of Rāmānujācārya*, The Educational Publishing Co., Madras, 1961 である。さらに、註釈としては、Uttamūrtivīrarāghavācārya (ed.), *Śrībhāṣya*, Ubhayavedāntagrānthamālā, Madras, 1967 所収の Sudarśanasūri 作 *Śrutaprakāśikā* を参照した。

<sup>2</sup>*Śrutaprakāśikā* が dikṣā を saṃkalpa と解しているのに従った。

<sup>3</sup>シュリー=ラクシュミー女神とは、ヴィシュヌ神あるいはナーラーヤナ神の妃であり、ここでは、最高のブラフマンがヴィシュヌ神あるいはナーラーヤナ神だとされているのである。

<sup>4</sup>cl. *Śrutaprakāśikā*, p. 7.

<sup>5</sup>ここで下敷きにされている、神々の乳海攪拌による甘露の抽出についての神話については、*Viṣṇu Purāṇa* I. 9 81ff. 参照。

## [2] 『ブラフマ・スートラ』 I.1.1 の各語の意味

神聖なるバウダーヤナの著した膨大な『ブラフマ・スートラ註』は、先師たちがすでに要約しているところだが、以下では、その彼らの見解に従って、スートラの言葉が説明されることになるだろう。

「さてこれよりブラフマンの考究が [開始される]」(『ブラフマ・スートラ』 I.1.1)。

ここ(スートラ中)で、この(最初の)さてという語は、「直後に」という意味である。また、これよりという語は、すでに行われたこと(すなわちヴェーダの祭式部の考究)が [ブラフマンの考究の] 原因となっているという意味である。すなわち、ヴェーダをその [六] 肢体<sup>6</sup> および頭部(ウパニシャッド)とともに学んで、「[ヴェーダの祭式部の考究から得られるような] 単なる祭式に関する知識は、果報が少なく不確かである」と理解することで、解説への希求が生ずると、その直後に実に、無限で確実な果報のあるブラフマンの考究(ブラフマンを知りたいという欲求)が生ずることになるのである。

[そしてこの] ブラフマンを知りたいという欲求 (brahmaṇaḥ jijñāsā) が **ブラフマンの考究 (brahma-jijñāsā)** なのである。[ここで] 「ブラフマンを」 (brahmaṇaḥ) というのは目的(行為対象)を意味する第六格である。というのは、「[第六格の接尾辞は]、行為主体と行為対象を示す際には、kṛt 接尾辞で終わる語とともに用いられたときに、[語のあとに用いられる]」<sup>7</sup> という特別の規定があるからである。[第六格を] 一般的関係の意味で理解したとしても<sup>8</sup>、知りたいという欲求には目的(行為対象)が必要なわけだから、[ここで第六格で示されている brahmaṇaḥ が] 目的(行為対象)の意味だということは成り立つ。だがそれでも、[このように] 間接的に得られた意味よりは、直接的に表されている意味のほうを受け入れるべきである。従って、[brahmaṇaḥ は]、目的(行為対象)を示す第六格だと

<sup>6</sup>ヴェーダの六つの補助学(vedāṅga)のことで、祭事学、音韻学、韻律学、天文学、語源学、文法学である。

<sup>7</sup>*Pāṇinisūtra* II 3. 65. brahmaṇaḥ jijñāsā の場合で言えば、まず、brahmaṇaḥのnaḥ (na) が第六格の接尾辞である。一方、kṛt 接尾辞とは、動詞の語根に付加されて、動詞からの第一次派生語を作る際に用いられる接尾辞であり、ここでは、/jñā (知る) という語根に、sa という kṛt 接尾辞を付加することから、jijñāsā (知りたいという欲求) という派生語が作られているのである。従って、ここでこのパーニニの文法規定に従えば、第六格の接尾辞 (na) が付加された語 (brahmaṇaḥ) が、kṛt 接尾辞で終わる語 (jijñāsā) とともに用いられているわけであるから、この語は、知りたいと望む行為の行為主体と行為対象を示していることになるわけだが、ブラフマンが知りたいと望む行為の主体であることはありえないので、ブラフマンはその行為の対象(すなわち知りたいという欲求という動詞派生の名詞の動詞部分の目的語)となるはずだ、という論議なのである。

<sup>8</sup>ここでは、*Pāṇinisūtra* II 3. 50 の規定 saṣṭhi śese (「その他の場合には、第六格の接尾辞が用いられる」) が問題とされており、ここで言う「その他の場合」とは、動詞と結びついた語の意味や名詞語幹の意味を除く、所有者と所有物等の一般的関係のことである。

理解されるのである。また、「[一般的関係ではなくて] 特定の関係を表す第六格は、複合語を作ることができない」<sup>9</sup> ので、目的（行為対象）を意味する六格の場合には、複合語となることが禁じられているのだなどと、疑うべきではない。なぜなら、「krt 接尾辞で終わる語と結びついた第六格の語は、複合語を作る」<sup>10</sup> という、例外の例外(pratiprasava)<sup>11</sup> が存在するからである。

ブラフマンという語は、最高のプルシャを表しており、本来的に [この最高のプルシャは]、あらゆる欠陥とは無縁で、限りなく卓越した無数の吉祥な美德の集まりなのである。というのは、ブラフマンという語は、偉大さという美德と結びついてあらゆるところで用いられてるからである<sup>12</sup>。すなわち、本質と美德に関して偉大さの限りなく卓越した者こそが、これ（ブラフマンという語）の一義的な意味なのであり、そしてそれこそが、万物の主宰神なのである。従って、ブラフマンという語は、それ（万物の主宰神）だけを一義的には意味しているのである。一方、[ブラフマンという語は、] それ（万物の主宰神）以外のものを意味する場合には、そのもの（万物の主宰神以外のもの）が備えているわずかな美德と結びついているので、比喩的な意味で用いられている。なぜなら、[ブラフマンという語は]、最高神(bhagavat)という語と同じように、数多くの意味を想定することが不適切だからである。そして、この者(万物の主宰神)こそを、三つの苦しみ<sup>13</sup> に苦しんでいる人たちが、不死に達するために知りたいと望んでいるのである。従って、万物の主宰神であるブラフマンが、考究(知りたいという欲求)の目的(行為対象)となるのである。[そして] 考究とは、知りたいという欲求であり、欲求にとっては、欲求の対象こそが主要なものであるから、ここでは、欲求の対象である知識が命じられているのである。

### [3] 『前ミーマーンサー・スートラ』と『後ミーマーンサー・スートラ』は一つの聖典

ミーマーンサーの前半部分（前ミーマーンサー）で知られた祭式は、果報が少なく不確かであり、一方、それに続く部分（後ミーマーンサー）で確定されるはずのブラフマンの知識は、果報が無限で不滅であるから、これより(まさにこういった理由で)、祭式についての知識が生じた直後にブラフマンを知るべきだと、[『ブラフマ・スートラ』の最初に]

<sup>9</sup> Pāṇinisūtra II. 2. 10, Vārttika.

<sup>10</sup> Pāṇinisūtra II. 2. 8, Vārttika.

<sup>11</sup> pratiprasava については、K.V. Abhyankar, *A Dictionary of Sanskrit Grammar*, Oriental Institute, Baroda, 1961, p. 244 参照。

<sup>12</sup> ここでは、brahman という語が、/brh (増大する、偉大である) という語根から派生したものだということ、前提とされているのである。

<sup>13</sup> 「三つの苦しみ」とは、肉体的病気や精神的不均衡などの内的な原因によるもの (ādhyātmika) と、植物や動物などによって引き起こされる外的な原因によるもの (ādhibhautika) と、夜叉・羅刹・惑星などの原因によって引き起こされる諸天が原因であるもの (ādhidaivika) の三種である。Cf. *Sāṃkhyā-kārikātattvakaumudī* 1.

述べられているのである。このことを、註作者（パウダーヤナ）は次のように述べている。

「祭式についての理解が生じた直後に、ブラフマンを知りたいという欲求が生まれる」と。

さらに彼は、カルマ・ミーマーンサー（＝前ミーマーンサー＝『ミーマーンサー・スートラ』＝『ジャイミニ・スートラ』）とブラフマ・ミーマーンサー（＝後ミーマーンサー＝『ブラフマ・スートラ』）が一つの聖典であることを、後に「次のように」述べている。

「この身体を持つもの（最高のアートマン＝ブラフマン）〔を主題とする聖典『ブラフマ・スートラ』〕は、十六章からなる『ジャイミニ・スートラ』<sup>14</sup>と一緒にしているので、〔この二つが〕一つの聖典であることは確立している」と。

従って、『前ミーマーンサー・スートラ』（＝『ジャイミニ・スートラ』）と『後ミーマーンサー・スートラ』（＝『ブラフマ・スートラ』）との区分は、『前ミーマーンサー・スートラ』における各六章からなる二つの部分という区分や<sup>15</sup>章の区分<sup>16</sup>と同じようなもので、明らかにしようとする主題の違いによるのである。すなわち、『ミーマーンサー聖典』は、

「さてこれよりダルマの考究が〔開始される〕」（『前ミーマーンサー・スートラ』I.1.1）

で始まって、

「聖典によれば帰還しない。聖典によれば帰還しない」（『後ミーマーンサー・スートラ』IV.4.22）

で終わり、〔そこには〕特定のつながりによって限定された順序があるのである。

〔その順序を〕詳しく説明すれば次の通りである。まず第一に、「ヴェーダを学習すべきである」（svādhyāyo adhyetavyah）<sup>17</sup>という学習〔を命ずる儀軌〕によって、svādhyāyaという語で表現されているヴェーダという文字の山を、暗唱することが命じられているの

<sup>14</sup>12章からなる現行の『ジャイミニ・スートラ』に4章からなる Samkarsakānda を加えたものか。

<sup>15</sup>『前ミーマーンサー・スートラ』は、基本祭（prakṛti）を扱う1-6章と、応用祭（vikṛti）を扱う7-12章の二つの部分に大きく分かれる。

<sup>16</sup>すでに述べたように、『前ミーマーンサー・スートラ』は12章からなる。

である。そしてその後、「その学習とは、どのような形のもので、どのように行うべきなのか」という期待が生じた際に、「八歳のバラモンの男子に入門式を行い、「その後にヴェーダを」学習させるべきである」<sup>18</sup> や、「バラモンは、シュラーヴァナ月あるいはバードラパダ月の満月日に、規則に従って入門式を行った後、四カ月半、心を集中してヴェーダを学習すべきである」<sup>19</sup> などの特定の誓戒や宗教的規定に関する教示によって、必要なことが命じられるのである。

#### [4] ヴェーダ学習の意義

このように、良い家柄の生まれで、善行に専念し、精神的な美德を備え、ヴェーダをよく知る師によって入門式が行われ、特定の誓戒や宗教的規定を遵守する者が、師が唱えるのに従って「ヴェーダを」唱えて、その結果「ヴェーダという」文字の山を暗唱するのが、「学習」なのだとして理解されるのである。また「学習」とは、ヴェーダの聖化（あるいは浄化）(saṃskāra) でもある。というのは、「ヴェーダを学習すべきである」とあるように、ヴェーダは「学習という行為の」行為対象であることが理解されるからである。[そしてこの] 聖化（あるいは浄化）とは、実に、他の為すべきことに適したものとなる原因なのである<sup>20</sup>。そして、ヴェーダが聖化（あるいは浄化）されるべきものだというのは正しい。というのは、「学習（＝暗唱）によって聖化されたヴェーダが」、ダルマ・実利・愛欲・解脱という四つの人間の目的とその達成手段を人に理解させるからであり、また、「そのようなヴェーダは」、低唱すること (japa) 等それ自体で、その（人間の目的の）達成手段となるからである。このように、「ヴェーダの」学習を命ずる儀軌は、マントラを唱え宗教的規定を守って、「ヴェーダという」文字の山を暗唱することだけで終わるのである<sup>21</sup>。

[このようにヴェーダの] 学習によって暗唱されたヴェーダは、それ自体でまさに、有

<sup>17</sup> *Taittirīya Āraṇyaka* II. 15. 7.

<sup>18</sup> 出典不明。

<sup>19</sup> *Manusmṛti* 4. 95. 渡瀬信之訳『マヌ法典』中公文庫、1991年参照。

<sup>20</sup> ここで前提となっているのは、祭式における神々の聖化や供物の浄化に関する論議だと思われる。すなわち、祭式において神々を勧請する際に唱えるマントラを正しく唱えることで神々が聖化され、供物に水をかけることで供物が浄化されるというような場合である。この聖化あるいは浄化という祭式行為は、その行為の対象である神々や供物にたいして作用して、それらを、当該の祭式という、個々の聖化あるいは浄化行為とは異なる為すべきことに、適したものへと変容させるのである。それと同様にヴェーダの学習の場合にも、ヴェーダの学習すなわち暗唱によってヴェーダ自体が聖化あるいは浄化されて、他の為すべきこと（たとえば人間の目的とその達成手段の理解など）に適したものへと変容させられるのである。Cf. A.B. Gajendragadkar and R.D. Karmarkar (ed. and tr.), *The Arthasaṃgraha of Laugākṣi Bhāskara*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1984 (rept.), p.29.

<sup>21</sup> すなわちここで、ラーマヌジャは、ヴェーダの学習を命ずる儀軌「ヴェーダを学習すべきである」が、単なる暗唱をもって終わるものなのか、それとも意味の理解という結果を伴うものなのかという、ミーマーンサー学派の議論に関して、単なる暗唱をもって終わるものだとする立場を取っているのである。Cf. *Arthasaṃgraha*, p. 1.

意義な結果をもたらす好ましい事柄を理解させるものであること<sup>22</sup>が見て取れるのである。そのため、ヴェーダを学習した者は、暗唱したヴェーダから理解される、有意義な結果をもたらす好ましい事柄を、表面的に見て取ったのち、[ヴェーダの]文章の考察という形のミーマーンサー——[それは]それ（有意義な結果をもたらす好ましい事柄）に特有の本質やあり方を確定するという結果をもたらす——の聴聞をまさに自ら開始するのである。

#### [5] ウパニシャッド考察の意義の典拠

そこ（ヴェーダの中）で、祭式を命ずる儀軌の本質について考査して、諸祭式は果報が少なく不確実なものだと見て取り、[一方]、学習によって暗唱したヴェーダの一部であるウパニシャッドの文章では、不死を本質とする無限で確実な果報を表面的に理解する。このような人に、シャーリーラカ・ミーマーンサー（身体を持つものである最高のアートマンの考察）——すなわち、それ（不死という本質）を確実なものにするという果報のあるヴェーダーンタ（ウパニシャッド）の文章の考察——の資格ができるのである。

たとえば、ヴェーダーンタ（ウパニシャッド）の文章は、単なる祭式の果報が滅してしまふのにたいして、ブラフマンの知識の果報が不滅であることを、[次のように]示している。

「ちょうど、この世において、祭式によって得られた世界が滅するように、まさにあの世において、福德によって得られた世界は滅びる」<sup>23</sup>。

「この者にとって、それ（祭式によって得られた功德）は、まさに滅びるだろう」<sup>24</sup>。

「不動なものは決して無常な祭式によっては得られないからである」<sup>25</sup>。

「祭式という形の船は不安定なものである」<sup>26</sup>。

「祭式によって得られた世界をよく見て、バラモンは無関心になるべきである。作り上げられたものでないもの（ブラフマン）は、作り上げられたもの（祭式）によっては存在しないのである。そのことを知るために、かの者（弟子）は、薪を手にして、学識があつてブラフマンに専念する師のもとに向かうべきである。心を静め感官を制御して正しいやり方で近づいてきたかの者（弟子）に、かの知者（師）は、不滅にし

<sup>22</sup>Cf. vedapratipādyah prayojanavadartho dharmah「ヴェーダによって教示されるべき好ましい事柄で、有意義な結果をもたらすものがダルマである」(*Arthasamgraha*, p. 2)。

<sup>23</sup>*Chāndogya Upaniṣad* VIII. 1 6

<sup>24</sup>*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* III. 8. 10.

<sup>25</sup>*Kāṭha Upaniṣad* II 10.

<sup>26</sup>*Mundaka Upaniṣad* I. 2 7.

て真実のプルシャを知ることのできるかのブラフマンの明知を、ありのままに語ったのである」<sup>27</sup>。

「ブラフマンを知る者が最高のものに到達する」<sup>28</sup>。

「かの唯一者を見る者は、再び死に向かうことはない」<sup>29</sup>。

「真に見る者は、死を見ることはない」<sup>30</sup>。

「彼は自らの王となる」<sup>31</sup>。

「かの者をおくのごとく知った者は、この世で不死となる。かの者をおくのごとく知って、死を超越する。この他に進むべき道はない」<sup>32</sup>。

「アートマンと突き動かすもの（ブラフマン）とは異なると考えて、そのためにかの者（突き動かすもの）に祝福された者は、不死性に達する」<sup>33</sup>等と。

## [6] ダルマ考察の必要性

[反論] 補助学を伴うヴェーダの学習のみから、諸祭式の果報が天界等であり、天界等は滅するものであり、ブラフマンの念想 (upāsana)<sup>34</sup> の果報が不死であるということが、まさに知られる。そしてその直後に、解脱を求める者が、ブラフマンを知りたいと望み始める（ブラフマンの考究へと向かう）のである。[だとすると]、ダルマの考察は何のために必要とされるのか（必要ないのではないか）。

[答論] そうだとすれば、シャーリーラカ・ミーマーンサー（身体を持つものである最高のアートマンの考察）にも向かう必要がなくなってしまうことになる。なぜなら、補助学を伴うヴェーダの学習だけから、すべてが知られるからである。

[反論] その通りである。通り一遍の表面的な理解は確かに存在している。だが文章は、論理に支えられてはじめて、意味の確定するものとなるのだから、[この段階ではまだ]、意味は表面的には理解されてはいても、疑問や誤りを越えるものとはなっていない。そのため、それ（意味）を確定するために、ウパニシャッドの文章の考察を行わなければならないのである。

[答論] [だとすれば] まさに同じ理由で、ダルマの考察も行うべきだと、あなたは思っ  
てしかるべきである。

---

<sup>27</sup> *Muṇḍaka Upaniṣad* I. 2. 12-13.

<sup>28</sup> *Taittirīya Upaniṣad* II. 1. 1.

<sup>29</sup> 出典不明。

<sup>30</sup> *Chāndogya Upaniṣad* VII. 26. 2.

<sup>31</sup> *Chāndogya Upaniṣad* VII. 25. 2.

<sup>32</sup> *Taittirīya Āraṇyaka* III. 12. 7.

<sup>33</sup> *Śvetāśvatara Upaniṣad* I. 6.

<sup>34</sup> upāsana は、ミーマーンサー対ヴェーダーンタという枠組の中での論議では「念想」と訳し、バクティの脈絡では「崇拜」と訳すこととした。